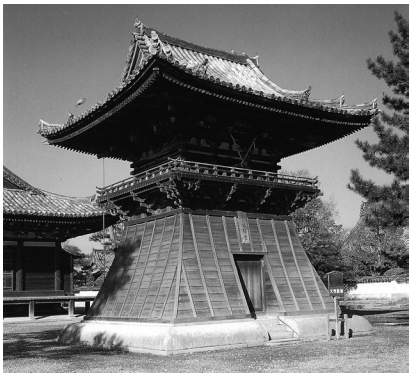
鶴林寺の銅鐘

かくりんじのどうしょう

文化財愛護シンボルマーク

名　　称	鶴林寺の銅鐘	所 在 地	加古川市加古川町北在家 424 番地
別　　称	朝鮮鐘、高麗鐘	所 有 者	鶴林寺
数　　量	１口	指　　定	重要文化財
寸　　法	高さ 94.5cm、口径 53.0cm	指定分類	工芸品
材質・技法	青銅　鋳造	指定名称	銅鐘
時　　代	平安時代後期　11 世紀 （朝鮮　高麗時代）	指定年月日	明治 34（1901）年８月２日

鶴林寺の銅鐘



鐘楼
（加古川市教育委員会 1995『加古川市文化財図録』より）

竜頭

撞座、下帯

この銅鐘は、応永14（1407）年に建立された鶴林寺の鐘楼（国指定重要文化財）に吊るされている梵鐘です。

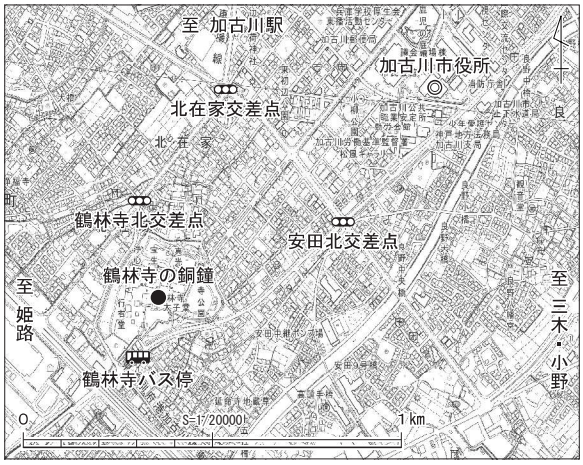
梵鐘は、その製作地によって中国鐘、朝鮮鐘、和鐘（日本鐘）に大別され、それぞれが他の鐘とは異なる際立った特色をもっています。

鶴林寺の銅鐘は、竜頭が体躯をＳ字形に曲げた単頭で、その後ろに円筒形の甬（旗挿）を立てていること、鐘身に袈裟襷の区画をもたないこと、上帯・下帯を華麗な牡丹唐草文で飾ること、上帯の下に牡丹の文様帯による乳郭を設けている[1]ことなど、朝鮮鐘の特徴を有しています。

ただし、一般的な朝鮮鐘が鐘身に天人像や仏・菩薩像を鋳出すのに対し、本鐘にはそのような装飾がありません。また、大多数の朝鮮鐘が二方ないし四方に撞座を配するのに対して、本鐘は三方撞座であるなど、通有のものとは異なった特徴もみられます。

これらの特徴などから、この銅鐘は高麗時代の11世紀後半に制作されたものと考えられています。

なお、この銅鐘の来歴については、江戸時代の旅行ガイドブックである『播州名所巡覧圖絵』において「唐物」と記されているほか、平安時代前期に仏の教えや悟りの道を求めて唐へ渡った慈覚大師円仁によって将来されたという寺伝[2]が残っています。



国内で確認されている47例の朝鮮鐘のうち（坪井1974）、兵庫県内では鶴林寺と尾上神社の２口があるのみです。鶴林寺の銅鐘は、国内にある希少な朝鮮鐘であり、この地域と朝鮮半島との海を渡った交流を考えるうえできわめて重要な文化財といえるでしょう。

（文・写真／平尾）

1）乳郭には３段３列の乳の存在が窺えますが、現在は乳座を残すのみで乳はすべて失われています。

2）円仁が唐へ渡ったのは９世紀代のことで、鐘そのものの年代とは一致していません。

●参考文献

坪井良平　1974『朝鮮鐘』角川書店
野口武彦・幹 覚盛　1981『古寺巡礼 西国 ４鶴林寺』淡交社
刀田山鶴林寺　2012『鶴林寺 信仰の諸相』鶴林寺叢書４　法藏館

●キーワード

鶴林寺　鐘楼　梵鐘　朝鮮鐘　竜頭　甬　上帯　下帯
牡丹唐草文　乳郭　乳　乳座　天人像　仏・菩薩像
撞座　高麗時代　『播州名所巡覧圖絵』　円仁　尾上神社

●所在地　兵庫県加古川市加古川町北在家424番地

●交　通　JR神戸線「加古川」駅発かこバス別府ルート「鶴林寺」バス停を降りてすぐ
お車の場合、加古川バイパス「加古川ランプ」から南へ約３km

編集・発行：加古川市教育委員会　文化財調査研究センター
令和５年３月31日（2023.03.31／1000）